## ２．研究の詳細

| | | | |
|---|---|---|---|
| プロジェクト名 | 環境造形の研究―大学の森における身体とランドスケープをテーマとした実験的空間創出の試みと造形を通した環境教育の展開― | | |
| プロジェクト期間 | 平成25年度～平成26年度 | | |
| 申請代表者<br>(所属講座等) | 阿部守（美術教育講座） | 共同研究者<br>(所属講座等) | |

毎日通り抜ける森の道がある。季節ごとに森の表情は変化し、風・音・地面の感触・土の匂いなど、それらは一日として同じ日はなく、豊かで清々しい表情をもつ。この大学の森との関わりも既に30年余りが経過し、最近、近くに建物が建設され、一時はどうなることかと案じたがそれなりに観察できる環境は維持されている。この森を研究の対象として、さらにその空間的魅力を引き出すことを主眼としたものがこのプロジェクトである。多くの公園がランドスケープ・デザインをベースにした庭園や遊具を用いて空間演出するが、ここではそのようなコンセプトは避け、森の表情を視覚のみならず五感で味わうことのできるランドスケープ・デザインを自然の環境を活かしながら創造することにし、造形リテラシーの確立を目指すものである。

空間を創造する行為とは、コンテクストと身体との間に関係性を与える「場所と時間」に対し、素材を選定し、さらに幾層にもわたる要素を構造化することと捉える。この観点から、主に鉄と自然環境を結び付けた空間造形を試行することから見えてくる新たなランドスケープを大学の森にサイトスペシフィックな空間づくりとして捉えていく。森の調査・分析から、様々に結び付けられるイメージを獲得し、コンセプト作りを経て作品制作に展開する。

この一連のプロセスを研究し、客観的に論述することは、次世代に通ずる「空間」及び「もの」の新たな関係の創出に繋がる。さらに、こどもたちに自然環境での造形芸術・環境造形の可能性と楽しさを体験学習させる計画である。

地形、植生、水の流れ、土壌などすべての要素は常に変化の過程にあって、ランドスケープの状態を特徴づけるコンテクストは、どのような場所にもいくらでも隠れている。それらを読み取っていく感性を、「知識と技術」として開発し、現実の橋渡しをするための社会的道具を提供することが、空間造形・環境芸術・建築さらに産業デザインの基本的な役割である。また、図画工作科の主要単元となっている「造形あそび」はまさに感性を研ぎ澄まして環境と関わることの重要性を育むものとして捉えられている。この観点からも美術教育に資する研究として位置づけることができる。

【方法および制作】としては、

Ⅰ.コンセプト基礎 STEP1：森の観察マップ作り―プロジェクトの根幹を成す地図づくり。様々な基本情報を収集し、地図を入念に読み込み、さらにKJ法などを応用し、何種類かの情報マップを作成する。五感マップ－鳥や動物の視点からのマップ・色彩マップ・テクスチャーマップ・嗅覚マップなど

Ⅱ．コンセプト基礎STEP2：時間的要素、すなわちこの森の歴史を読み取る

Ⅲ．コンセプト基礎STEP3：上記の２つの段階を総合させ複合した地図を作成

北海道 札幌モエレ沼公園/美唄市 アルテピアッツァ美唄/音威子府村 アトリエ３モア調査研究

Ⅳ．CLIMATEを読み解くプロセスを経て、具体的なオブジェ制作のためのアイディアスケッチの展開

Ⅴ．制作の展開

アジアとの玄関として古代から存在してきた北部九州のこの地においても、今日、他の地と同様 IT 革命の影響は著しく、独自の風土を維持することは極めて困難な状況となっている。我が国全体が恰も一体物ように即座に変化し、すべてにおいて、均質化は加速度的に浸潤し、今や価値観すらこの国では均質化されかねぬ雰囲気の下にあるように感じられる。唯一われわれに残された特権的能力は創造力であるかも知れない。しかし、このような状況下において芸術は、もはや娯楽的な消費物に堕している感がある。芸術家の社会への与したかも新たなる方向性を見出せないのが今日の現状としてある。

その象徴的な傾向の一つに、美術のコミック化が挙げられよう。サブカルチャーの隆盛は、20 世紀美術が培ってきた造形理念さえも消去してしまうような勢いに感じられる。この時期に敢えてー身体・ランドスケープ・自然ーを研究テーマに普遍性を踏まえた造形理念の再構築を試みたい。この新たな造形理念の創出に身近なランドスケープを取り上げ、長期間にわたり、じっくりと空間を読み解く方法論とその実制作を追究することとした。研究対象として選んだ森のサイトは、城山の尾根として、山頂と赤間の通称メインストリートに繋がる地形に位置する。メインストリートが尾根の延長として認識できるのは道路が高い位置に作られ、両側は低地になっていることからも想像できる。この森は人工的によく管理されつつも自然の植生や四季の昆虫などにそこが原生林と言わぬまでもある程度自然環境が維持されていることが分かる。この環境をどのように読み解き、造形リテラシーとしての文脈を構築し、今日の美術状況に一石を投じられる造形理念に結びつけることができ得るか、という点に期待が持てる。

学生指導にとって身近な場所で、研究に立ち会える点。研究の方法と結果を学内はじめ、広く地域に発信することができる点等が挙げられ、図工科・美術科の今日的課題である、どのように環境をテーマとした題材設定ができるか、という美術教育の課題解決に資する内容を多く含んでいる。実際に児童・生徒をサイトに招き授業実践を行う出発点と位置づける。

大学の森をサイトとして選定し、制作を展開するわけであるが、プロセスの詳細な分析とその吟味が重要である。その研究に臨むにあたり、熊本県高森町にある分校跡地をつかった、地域振興のための施設である、フォークスクールでの研究制作を展開した。阿蘇・根子岳に抱かれた本スクールは、アート・クラフト・食育・農業を取り込んだ、まさに地域と結びついたエコロジーの発想から成る公的施設である。この場を活かした自然と密着しつつ、人々と親密に関わることをメインコンセプトとして、研究制作した。

以下は、研究発表として制作した作品を図版で示す。

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。
○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。